

てさぐれ！ ケムリクサ(口調編)

シベリア！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ケムリクサの単発ギャグものです。

拙い出来かもしれませんが、笑ってみて頂けると幸いです。

※pixivにも同じ作品を投稿しています。

目次

てさぐれ！ ケムリクサ（口調編）

てさぐれ！ ケムリクサ（口調編）

昔々、ある所に、大変仲の良い6人の姉妹がいた。

6人は水を求めて見知らぬ土地を歩き回り、たまあゝに出てくる赤色の霧から逃げ回ったり、たまあゝに襲つてくる赤色のムシを力を合わせて撃退したり、色々大変ながらも楽しく生きていた。

しかし、そんな6人にも悩みがあり……

「えつと……りく……じゃない、りなりやん？」

「私はりつだよ、りようちゃん」

「ありやく、また間違っちゃったか」

「声で大体分かるでしょ」

「その辺、私には分からないんだよなあ、匂いも……あんまり変わんないし」

6姉妹の長女がすんすと鼻を鳴らす。

6姉妹は全員同じ顔、同じ匂い、同じ髪型、同じ口調だったので、何度も何度もお互いの名前を間違えてしまう。

「りっちゃんはき、どうやって声、聞き分けてるの？」

「どうやって……聞こえ方が違うとしか……」

「ううくん、やっぱり分かんないなあ……」

「まあ、私も匂い、分からないからおあいこだよ」

「でもこの先困らない？ りっちゃんだと思つたらりなちやんだつたり、

りんちゃんだと思つたらりよくちやんだつたり、今まで何度もあつたでしょ？」

「そくだねえ、この前、名前を間違えられて、りんが泣きそうになつたし」

「何とかなんないかなあ」

「そくだねえ、何か策は……」

2人がうくと考え込み……

「そーだつ！ 声の違いが分からないなら、喋り方を変えれば良いん

だ！」

基本大雑把な三女がぼんつと手を叩いた。

……

……

……

10分後、部室。

何の部室かはあえて明言を避けよう。

「はい、そんな訳で今日はみんなの口調を考えてみよう」

「相変わらず唐突だなオメーら」

「こういうの、りつりよう体制って言うんだって」

「りよくは色んな事知ってるね」

「いや、私も……そこまで詳しく知ってる訳じゃないけど……」

「この部屋、色んな形のものがあるね。じゅるり……」

「あ、ちよつと！ 私が調べるまで食べないでよ！ 新しい文字が見

つかるかもでしょ」

「食べても後で出せるし、大丈夫つしょ」

「そういう問題じゃないの！ 全く……それで、どうやって口調決め

るの？」

「えつと……りつちちゃん、どうしようか？」

「りようちゃんは、何か良い考え、無いの？」

「全く無い」

「胸張って断言すんな！」

「とにかくみんなでてさぐつてこーぜ！」

「「「……」」」」

「……全員無言かよっ!? 何でも良いから何か言えよ！」

「いや、これ下手な事言ったら自分で使う羽目になりそうじゃん」

「そう言えば、その辺決めてなかったな。どうすつぺ？」

「今の……りよくが言ってた、『じゃん』っての、良い感じじゃない」

「びやあつ!? 拾われたあつ!?」

「あ、ごめん……余計な事、だったのかな？」

「うんうん、りんのフラインプレーだよ。早速一個口調が決まった

ね」

「りよくちゃんは今後喋る度に『じゃん』ってつけると……」
「ちよつと待ったあつ!! これからずっと語尾にじゃんってつけないといけないの!？」

何か凄く馬鹿っぽいじゃん!!」

「りよくちゃんは時々『じゃん』ってつけてたから、大丈夫だよ」

「ほいそんじゃ次の案、誰かあるか？」

「……」

「……やっぱ無言かよっ!? 何か言えよ!」

「とりあえずルール変えよう。」

提案した本人が口調変えさせられるんじゃ迂闊に喋れないよ」

「そうかも……じゃあこうしよう」

基本大雑把な三女が部室の奥から古びた箱を引つ張り出す。

『カード川柳用』と書かれたその箱であるが、6姉妹全員が漢字を読めないため、誰もその箱の中身が何のための物かが分からない。

「確かこの……えつと……」

「ペン」

「そうそう、ペンっていうので文字が書けるんだったよね？」

これにみんなが考えた口調を書いていって、

最後に一枚ずつ配って決めるってのはどうかかな？」

「6分の1で自分に当たるのか……でも、さつきよりは話が出しやすいかも」

「じゃあさつきりよくちゃんが考えた『じゃん』って書いて……」

「考えた訳じゃないって!」

「じゃあルールも決まったところで、誰か何かないか？」

「はい!」

「おっし、じゃありなの考えた……新しい口調!」

「にゃあ!」

「ド直球!」

「あるけど! そういう口調のいるけど!」

「し、四六時中語尾ににゃあって……」

「やべえ腹振れる！ 腹痛えっ!!」

「ちよつとりなちゃん、試しにやってみて」

「今日も一杯食べて、お腹いっぱいだにやあ」

「あはははははっ!!」

「赤ムシが出たにやあ！ りなが齧ってやるにやあ!」

「腹痛えっ！ やべ、死ぬうっ!!」

「待つてりな！ 6分の1で自分に刺さるんだよ！ 良いの?」

5女は無言でサムズアップした。

「採用!」

「異議無し!」

「はいはい、2つ目の口調は『にやあ』と……」

なんだろう、この会議終わったら私ら凄いやない集団になってる気がする」

「りよくちゃん、そこは笑える集団って言うべきだと思うよ」

「長女! こういう時は長女が真っ先に留めるべきだし!」

何で真っ先に親指立てて採用何て言うんだよ!」

「いやあ、長女って言ったって最初に起きただけだからねえ」

「そうだけどさあ」

「誰もお姉ちゃんって呼んでくれないし……」

「オレは結構呼ばれてるぞ」

「そうだねえ、りく姉は……何と言うか、お姉ちゃん指数が高い感じだよねえ」

「時々どん臭いけど」

「うつせえな、お前らが痛みに鈍感なだけだろ」

「私達にとって、りくは大事な姉さんだよ」

「お、おう……わ、分かってりや良いんだけどな……」

「りんちゃん、私は?」

「りようも大事な姉妹だよ」

「やっぱり姉だとは思われてない!? 私長女だよね!」

「りようちゃんは……何と言うか、りようちゃんって感じだよね」

「鉄パイプ持って突撃するイメージしか無いな」

「お姉ちゃんと言うより……蛮族？」

「りくちやくん、皆が虐めるよ〜」

「はいはい、頼りにしてるよお姉ちゃん」

「おら、そろそろ別の案出せ、誰かいねえのか？」

「じゃあ……はい！」

「おっし、それじゃあ……りんが考える、新しい口調」

「じゅげむじゅげむごこうのすりきれかいじやりすいぎよのすいぎよ
うまつうんらいまつふうらいまつくうねるところにすむところやぶ
らこうじのぶらこうじパイポパイポのシューリンガンシュー
リンガンのグリーンダイグリーンダイのポンポコピーのポンポコ
ナーのちようきゆうめいのちようすけ……とかどうかな？」

「長いっ！」

「長すぎ！」

「本当に残念な姉だし……」

「りんちやくん、例えば赤霧が出たり、

赤ムシと戦ってる最中にその口調を使うとしてさ……」

「赤ムシだぞー、食べちやうぞー！」

「食べないでくださいー！」

「ああっ！ じゅげむじゅげむごこうのすりきれかいじやりすいぎよ
のすいぎようまつうんらいまつふうらいまつくうねるところにすむ
ところやぶらこうじのぶらこうじパイポパイポのシューリン
ガンシューリンガンのグリーンダイグリーンダイのポンポコピーの
ポンポコナーのちようきゆうめいのちようすけが危ない！」

「ぶはっ！」

「ちよ、反則……」

「じゅげむじゅげむごこうのすりきれかいじやりすいぎよのすいぎよ
うまつうんらいまつふうらいまつくうねるところにすむところやぶ
らこうじのぶらこうじパイポパイポのシューリンガンシュー
リンガンのグリーンダイグリーンダイのポンポコピーのポンポコ
ナーのちようきゆうめいのちようすけ！ 今助けに行くぞー!!」

「あははははははっ!!」

「破壊力スゲェ!!」

「笑いで戦争が止めれるよ！ 赤ムシも捧腹絶倒だよ！」

「てか口調じゃなくて呼び名になってる！」

5 姉妹が腹を抱えて笑い転げる。

「駄目……かな……」

「うんうん、りんは頑張って考えたよね」

「捧腹絶倒だったな」

「いやあ笑った笑った。笑ったけど……駄目だろこれ」

「流石に実用性無さすぎ、却下で」

「そうだねえ……」

「みんな……ごめん……」

四女がしよぼーんと首を垂れる。

「落ち込むなって、手探るってのは没ネタも楽しんでこそだろ」

次女が四女の肩をぽんぽんと叩いて励ました。

「りよう、アレが姉指数だよ」

「そつかあ、私に足りてないのはああいうのか……」

「んじゃ次のネタ誰かあるか？」

「はい」

「おっ、りようか」

「これで姉指数を取り戻すよ」

「んじゃあ長女の威厳を賭けて……りようの、新しい口調」

「だわさ！」

「だ……だわさ……？」

「いや、決して駄目って訳じゃないけど……」

「残念なネタじゃない」

「にやあの破壊力が凄すぎたな」

「でもまあ、他と区別するだけなら悪く無い感じ？」

「じゃあ、採用すっぺ」

「そうだね、3つ目は『だわさ』と……まあ、『にやあ』よりマシかなあ……」

「待って！ 待って！ 待って！ このネタ続きがあるから！ 捧腹

「絶倒だから！」

「え、聞きたいか？」

「……いや、別に」

「あの柱、美味しそうだな」

「聞いてよ！ 絶対面白いから！ これが面白く無かったら長女返上で良いから！」

「分かった分かった、仕方ねえな……はい、りょうちゃんの、新しい口調」

「だわな！」

「大して変わってない！」

「だからりょうちゃんはいつまで経ってもりょうちゃんなんだよ」

「もうりつりよう体制止めて、りく姉がリーダーで良いんじゃないかな」

「え、やだよ面倒臭え」

「りなは食べれば何でも良いかな」

「え、あの……りようは頑張ってると思う」

「もう私の味方はりんちゃんだけだよ……」

「どうする？ 4つ目『だわさ』にするか？」

『『だわな』と『だわさ』じゃ被ってるじゃん』

「んじゃ2つ併記でいくか」

「了解、『だわさ』または『だわな』と……」

「あと3つか……だんだん考えるのが面倒になってきたな」

「りくねえねは他のみんなと喋りかた違うから、

無理して口調変える必要無いんじゃないかな」

「あ、んじゃああと2つで良いのか。それならイケそうだな」

「それなら、6人中5人が特徴的な口調してれば、

最後の1人は特徴的じゃなくても判別つくんじゃない」

「りなちゃん賢い！」

「ふふくん！ りなちゃんは賢いんだ」

「じゃあ4つ目は『りく姉っぽく』、5つ目は『なにもなし』と……」

「あれ、『なにもなし』をりく姉が引いたら、

りく姉っぽい口調の娘が2人になるんじゃ……」

「増えるりく姉さん……悪くない」

「りんちゃん!? りんちやくんっ!?」

「りんねえね、りくちゃんは増えないよ」

「そうだね、ごめん」

「そろそろこの会議も飽きて来たし……んじや、オレから」

「りくちゃんが考えた、新しい口調は？」

「クポ！」

「く、くぽ……」

「何か分からないけど、危険な香りだねえ」

「りく姉、試しにやってみて」

「押してからさらに強めに押すクポ。 ドクつと来るクポ。」

「したら丸いの出るから選ぶクポ、したらすげえ光るクポ」

「ちよ!？」

「は、反則! それ反則!」

「似合わないし絶対!」

「いや、誰がやっても合わないよ絶対」

「りようちゃん、ちよつとやってみて」

「あの赤いの、また出てきてくれないクポく? もつと戦いたいクポ
く」

「あははははははっ!!」

「右から襲ってきたら……こうクポ! 下から出てきたら、こうやっ
て、こうだクポ!」

「りようちゃんが可愛くなってる!？」

「糸目とクポの相性が……ぶふっ! 駄目、もう限界いつ!!」

「腹が振れて戦い所じゃねえよ! 却下却下!」

「はいっ!!」

「りつの、新しい口調」

「ぴよん!」

「にやあと被ってるだろ!？」

「りつはウサギだぴよくん! さみしいと死んじやうぴよくん!」

「似合わねえーっ!!」
「は、破壊力が半端じゃない……」
「りん……みんなが虐めるびよん……」
「大丈夫、どんな口調でもりつ姉さんはりつ姉さんだから」
「でも、意外とイケんじゃね、インパクトあつし」
「待った! 地雷棒をこれ以上増やされたら溜まったもんじゃないよ!」
「ええ。じやありよくが何か考えろよ」
「本当は『じやん』もやめてほしいんだけどな……」
「はいそれじゃあ、りよくの新しい口調」
「えっと……ううんと……『なんだな』とか?」
「『なんだな』か……」
「りよくちゃん、ちよつとやってみてよ」
「残念な姉達なんだな、ロクなアイディアが出ないんだな」
「うくん、あんまりインパクトが無いな……」
「そうかな、私は良いと思うけど」
「りんは優しいねえ」
「だかなあ、駄目なもんはハッキリ駄目って言うのも姉としての慈悲だ」
「りくちゃんはこういう所で姉指数を稼いでいるんだナ」
「私に足りないのはそういうトコかなあ……って、
今りなちゃん、語尾になんだなってつけなかった?」
「……あ」
「りよくちゃん駄目だよ、既存の口調を丸パクリしちやう」
「急にネタ振りされたんだから仕方ないって!!」
「もう面倒臭いから6番目『なんだな』で良いんじゃねえか」
「はい! はいはーいっ!!」
「はい!」
「りなの、新しい口調」
「君は眼鏡かけるべきだ!」
「眼鏡!? 何それ!?!」

「眼鏡……目の見え方を変える道具……だと思う、たぶん」

「へえ。じゃああたしからも眼鏡をかけたらりよくちやんみたいに見えるのかなあ?」

「眼鏡が見つかったら試してみるのも良いかも」

「でも、会う度に眼鏡かけろって言うてる姉とか、正直想像したくないんだけど」

「うくん、悪かねえんだが、長いし……却下で良いか」

「はい!」

「りつの、新しい口調」

「やっと思つつけたぞ、故郷を滅ぼした男よ!」

「だから長いっての!」

「はい!」

「りんの新しい口調」

「ドヤアツ!」

「日常会話に混ぜて良い台詞じゃないだろ!」

「短くしてみたんだけど……駄目かな?」

「会話の度にドヤ顔になるりん……新しいかも」

「はい!」

「三度目の正直なるか、りよの新しい口調」

「ただしイケメンに限る!」

「またイケメンネタか!」

「鉄パイプに細いイケメンはいないって!!」

「急にイケメンが出てきて助けてくれるかもしれないでしょ!」

「現実見る長女!」

「だからアンタはいつまでたっても残念な姉なんだよ!」

「りんちゃん……」

「えつと……急にイケメンが出てきたら……出てきたら……いい、良いね」

「りん、駄目と思つた時は駄目だつて言っても良いんだよ」

「そんなこんなで夜はふけ……」

……

.....

「全員カードは引いたな？」

「うん……泣いても笑っても一発勝負……」

「りつ姉、後で交換使用は無しだよ」

『何も無し』来い、『何も無し』来い、『何も無し』来い……」

「まあ、私はどんな口調でも、戦えれば満足だからね」

「そういう意味では、りなも色々食べられれば満足だよ」

「んじゃあ1、2の、3で表にすつぞ……」

「1」

「2の……」

「「「「……3つ!!」」」」

6 姉妹が同時にカードをひっくり返し……

「びゃあああああーっ!!」

末っ子の断末魔の叫び声が部屋に木霊した。

「んだよ、オレが『りくつぽい口調』かよ、面白みがねえな」

「増えるりく姉さんはお預けか……」

「りく姉は唯一無二の存在って事ニヤー」

「りつ姉さんはどうだった？」

「私は語尾に『にやあ』をつける事になったニヤー。 りんはどう？」

「私は何も無しだった」

「一番の安全牌はりんに行ったか……じゃん。」

私はこれからずっとこんな喋り方しなきゃいけないの……じゃん

「とってつけたような言い方だナ。 ちゃんとやるんだナ」

「適応早っ!! ……じゃん」

「まあまあ、慣れるまではしばらくかかるだろうし、しかたないよ……」

「だわな」

「そう言うりよくちゃんもぎこちないナ」

「何にせよ、これで判別がつく……つくか？」

「多少はマシになるかも……じゃん」

「まあ、色々やってみるしかないんじゃない……だわな」

「口調だけじゃなくて、他にも何あると助かるかもだニャー」

「そう言えば、最初の人が残したメモに気になる事が書いてあってね……じゃん」

「へえ、興味あるなあ。教えてよ……だわさ」

「コスプレっていうんだけど……」